

随 想

公益財団法人 北九州産業学術推進機構
産学連携総括センター
参与

好奇心と執念

北井 三正
Mitsumasa Kitai



今夏、九州新幹線及び鹿児島からの高速船を利用して2泊3日で屋久島を初めて訪れた。

約20年前(1993年12月)に世界自然遺産に指定された屋久島には、屋久杉(樹齢1000年以上のもの)及び小杉(1000年以下のもの)の呼称が多く見られる。屋久杉の中でも「縄文杉」は推定年齢7200年(諸説あり、実際のところは4000年前後か)と言われ、その姿に圧倒され感動を覚えた。

屋久島は『月に35日雨の降るところ』で、国内最多の降雨量を記録している。このことが栄養分の少ない花崗岩の土質でも屋久杉が生きながらえてきた要因であり、成長の遅さが年輪のち密さ、硬さにつながり、多量の樹脂成分の防腐・抗菌・防虫効果も相まって途方もない寿命を維持してきた由である。

雨量の多さから、大きな滝も数多く、今回滝巡りでのマイナスイオン効果及び木の精に触れることで大いにリフレッシュする事が出来た。

ガイドから聴いた話で印象的だったのは、今残っている屋久杉は元来木の特性としては品質不良なもので、くせがあり、材料としては使用に適さないために、伐採されずに生き残ったとの話であり、人間社会にもある意味通じるものが有り、素直なだけでは世の中を渡っていけないこともあると身に詰まされる感じがした。

ところで、小職は現在、(公財)北九州産業学術推進機構(F A I Sと略称)の産学連携統括Cで産学連携の支援を業務としており、まる8年が過ぎた所である。

前職の関係もあり、主に環境・化学・バイオ等の分野で、素材、デバイス、プロセスの開発をテーマ

とする案件に多く関わってきた。国プロでは、経済産業省、NEDO、文部科学省、JST関連の事業を中心として、競争的資金の獲得に向けた提案申請支援、獲得後の事業推進を行ってきた。他にも、県やF A I S助成の事業等にも関与してきた。産学連携コーディネータの役割は、文字通り企業と大学等の研究機関との橋渡しをし、共同研究や競争的資金の獲得に向けた体制づくりを仕掛けることになる。

これまで、コーディネータとして心掛けてきたことは、自分が居なければ結びつかなかったかも知れない出会いをいくつか構築し、連携により良好な結果に繋げていきたいということであった。言わば、接着剤や糊(glue)のような役割である。

その役割を果たすためには、何よりも人と人との信頼関係がベースであり、一方的なtakeだけでなく、giveをも心がける必要がある。当方から如何に的確な関連情報を提供できるか、また最も大事な点は、申請に関わる準備の段階から如何に本音の議論を引き出し、課題の本質を浮き彫りに出来るか、そのことによって課題解決に至るより確度の高い方法を発案できるかが、提案の採択については事業化に向けた取組みにつながるものと感じている。

最初は、点と点との結びつきでの線分から始まり、線分のつながった長い線からそれぞれがつながり、面を形成し、やがては鳥の巣のようなネットワークを構築していけたらと願っている。

そのような活動の中で、(株)フジコー様とも出会った。(株)フジコー様は、北九州地域の数少ない元気のいい研究開発型企業の一つであり、なにかんづく研究開発の中心的役割を担う技術開発センターの諸氏との出会いであった。その印象は、コアとなるキー

テクノロジー(鋼材の表面コーティング加工技術)の確かさをベースに、技術の積み上げが非常にうまくいっているということであった。

自ら保有する技術が活かせる世の中のシーズを的確にとらえた上で、それを達成するための課題を解決することで「どのような姿にするのか、出来るのか」という、いわば「夢の姿」を描き、その実現に向けて熱い情熱を持って取り組んでおられる姿を目にする事が多かった。十分に練りこまれた戦略目標を達成するための戦術の策定・実行に優れているとの印象を持った。今後ともこのような良き社風を維持し、社業の発展につなげていただきたく願う次第である。

ここで、前職である化学会社での仕事にふれたい。研究開発部門に所属したが、仕事内容は、タネを生み出す基礎研究部門では無く、タネをナエ更には収穫が可能となる実生産規模での生産を可能とするための研究開発の取組みであった。最近よく言われる「魔の川」「死の谷」を渡るための本当に泥臭い仕事であったと思う。そうした長年の業務の中で、先輩同僚諸氏からの啓示や自ら習得したいくつかの事がらについて触れてみたい。

まずは、「好奇心と執念」。何事にも関心を持ち、諸々の現象に対して、「その依って来たる本当の原因は何だろうか?」「どうしてそのようなことが起こるのだろうか?」といった素朴な疑問をベースとした好奇心を持って、物事を見るくせが技術者・開発者にとって大切である。また、ある課題に取り組む場合、何としても解決を図るとの強い決意を持って、解決に至るまでは決してあきらめないとの執念が必要と認識していた。

また、常日頃から自然科学の世界で起こる現象は、一見複雑怪奇であっても、とことん突き詰めていくと案外簡単な事象・法則で起こっていることが多い。研究開発は、複雑(complicated)から単純(simple)に、現象を明確化していくことと考えていた。

諸々の現象を捉える上での理論的な裏付けとなる基本原則は、化学の分野では特に、全ての現象は、「熱力学」と「反応速度論」で語れるということであり、前者は「静的な(static)」、後者は「動的な

(dynamic)」とらえ方と解釈していた。各種実験データの理論的な解析から想定可能な仮説を立て、それをまた実験によって実証していくことの繰り返しだが、真実に近づく最も確実な道であるとの信念で取り組んだ。良好な実験結果を出すことも大事であるが、この条件ではうまくいかないというネガティブなデータをどれだけ多く取得しているかということも、実際の運転の際に大いに役立つことも経験的に学んだ。

最後に余談であるが、昨年秋頃ひよんなキッカケで、一生に一度フルマラソンを走ってみたいとのことで、職場内の人たちも巻き込み、「ひびきの歓走隊」なる小さなグループを結成して、定期的な練習を開始した。

その後、無謀にも還暦を過ぎた体に鞭打ち、今年3月に種子島ロケットマラソンのフルマラソンに初挑戦し、途中、両足の激痛に耐えかねてリタイア寸前なるも何とか完走することが出来た。

このことも、「フルマラソンとはどのようなものだろうか?」「いわゆる体力の限界とはどんな感じだろうか?」といった半分好奇心から始まり、目標とする大会への参加を決め、否応なく走ると決めた以上、何としてもやり遂げるとの執念にも似た思い一筋でした。

その後も継続的に練習中だが、その中で個人の想いの強さも大切であるが、チーム内のメンバー間での競争心と励ましあいといったチームワークの大切さも実感している。一人では心折れてしまう状況も、あいつには負けたくない、同じ目標に向かって頑張っている仲間がいると思うことで、苦しい練習も継続することができ、大会においても何とか目標を達成できるようになることから、こうした活動は、相応に意義深いものと感じている。また、健康面での効果も徐々に現れて来つつある。

以上、好奇心と執念を失わず、「何だろう」「なぜだろう」から始めて、「何としても」やり遂げることをモットーに、延べ30年余り、人生のほぼ半分を過ごした北九州地域での生活の中で、お世話になった方々への恩返しの気持ちで、今後とも微力ながら皆様のお役に立つ活動が出来ればと思っている今日この頃です。